口頭発表収録

聴覚障害を持ち自立する出身者に対する施設・社会の支援
～本当に自分のいるべき場所は合っているのか？～

林　美香
（至誠学園　友の会）

１．はじめに

筆者自身のこれまでの生い立ちや環境・体験をもとにお話致します。筆者は小学校４年より、母の難病により初めて児童養護施設を利用しました。そして当時の障害に対しての認知度、それによる生活環境について話していきたいと思っています。

２．取り組み内容

自分自身も周りの人も、当時は障害を持っているという認識がありませんでした。ほんの少し、耳が遠いだけだと思われていました。また、気分次第で聞こえないふりをしていると思われましたのでよく、無視していると言われていました。周りの人は、親の吹き回しもあるので仕方がないのですが、少しだけ音の反応が出来るのでそれで余計に耳を詳しく調べることもせず、遠いだけ、聞こえないふりをしているだけだと思われてきたこともあります。

当時は子どもでしたので親から可愛がられたい、認められたいという思いがありました。また障害者への差別が酷かった時代です。親もそうでした。街で見た目が明らかな障害者を見かける度、「ああいうのは人間じゃない。ああなったら終わりだ。なっちゃダメだよ」と言われていました。

そのため、私も「障害者＝人間ではない」と言う強迫観念があり、少しでも他人と違うと親から捨てられると言う恐怖がずっと付きまとっていました。学校でも、「耳つんぼ」と囃し立てられたりしていたので、他人と同じにならなきゃと必死になっていたのを思い出します。色んな人に、「なんで返事しないの」とよく怒られていました。なので、「私は他人の言っていることに耳を傾けていない、悪い子」と言うレッテルもはられていました。喋るのも得意でなかったため、発音も当時はおかしかったので周りからいじめられながらも普通にできるにはどうしたらいいのだろうと、毎日恐怖の連続でした。学校へ行くのも嫌になり、夜寝る時は「このまま目覚めることがなければいいのに」と毎朝思う日々でした。年齢が小学校１年くらいでしたので６歳～７歳くらいかと思います。

小学４年生のころ、児童養護施設に入所した後も、当時の職員の方々からは「ガールス

カウトに入りなさい」「みんなとバレーボールやりなさい」と言われ、他の子にいじめられるのを恐れ、交流したくなくてガンとして入隊しなかったのですが、バレーボールは強制的に入部になり、イヤイヤやっていたのが記憶に残っています。ですが、学園で舞踊の

写真 1　児童養護施設に入所していた当時　1988年

先生を呼んでやる舞踊だけは楽しくて、妹や妹と同じ年の子と一緒にグループホームから本園へ舞踊に行く時間は好きでした。そのような日々を過ごし、施設の男性Ａ職員から発音等についても指摘され、「それはこうだよ。発音は↑↓なの」と一つひとつ教えられ、自分のものにしていき、健常者同等かそこまで違和感がないくらいの発音が出来るようになったのだと思います。

担当のＡ職員は、そこまで耳が悪くないと思ったのでしょう。そして自身も子どもだったため、普通の人と同じにならないと言う強迫観念もあり、飲み込みが早かったとも思います。その時の児童養護施設に在籍していた期間が、１年程です。程なくして母が退院したので妹と一緒に退園し、親の元に帰りました。

学校の授業も、音楽の授業があったのですが、学校で楽譜の読み方も習い、メロディはピアノを囲みながらの授業だったのでピアノの振動で覚え、振動にもメロディが伝わるので楽譜と振動の感覚をつけていきました。歌を歌うという感覚は、中学で同級生に指摘され、覚えました。

写真 2　中学時代の合唱祭　1993年11月

合唱祭という学校イベントのため、音楽室でソプラノやアルトに分かれて歌の練習をするのですが、イマイチそう言う感覚がわからなかったため、ズレていたのか、クラスメイトに「この楽譜を見て歌って！」と言われ、楽譜通り歌っているつもりで音程があっていないようなので、せめてピアノのように自分の声の振動がわかったら…とその時に思いついたのが振動を感じる喉に手を当てて音程を確認するという、斬新な事を思いつきました。一つひとつ、健常者と同じになるように身に着けていきました。今思えば健常者の学校に通っていなければ、そして指摘されることがなければ知ることもなかった感覚・スキルだと思います。

社会に出る前の高校３年の頃。再入所先は高校近くのグループホーム。再入所になったのは、退園してから高校まで、時には父、時には母からの虐待が続いていたこと。「耳が聴こえないから、話が通じない！」と言う理由と、祖母の代から家庭が新興宗教に入信していて、筆者が信仰しなかったからです。そのため、ご飯を抜かれたり掃除の仕方が悪いと言われて殴られ蹴られたりしました。「宗教を信仰しないから耳が聴こえないんだ！だからお前はダメな人間なんだよ」と罵られていました。高校時代の友達がそれを見かね、児童相談所に引っ張って行ったことが理由で再入所となりました。

担当職員から、高校卒業する直前に「身体障害者手帳をもらいなさい」と言われました。高校３年で、まだ社会に出るのもこのような背景があり、上手く聞いて交流できるか不安だった時期でした。高校生活も、友達とあまり深入りせずに、聞いていない（聴こえていない）のを悟られないようにごまかしていました。そのような日々の中、卒業して会社に入ったら、やっていけるのだろうか？電話はどうしよう？（話してるのが分からなくて苦手だし、電話出て！と言われたら…）と言う不安でいっぱいの毎日でした。

高校時代、難聴の先生が勤務していたのですが当時は障害と認定されたわけではないので、相談する人もいませんでした。当然その先生にも立場が違うからと相談出来なかったのです。そんな中での、職員からの「障害者手帳をもらいなさい」とのことだったので、障害と言う認識もなかったので困惑しました。もっと障害の事について、いえ、自分の耳の事について調べるべきだったのですが、「自分は健常者だ！ちょっと手術をすれば治る普通だ！」と言う気持ちでいたのでそんなことも考えもしませんでした。ですが、病院の先生に調べてもらったところ、内耳、聴神経がダメなので手術が出来ないとのことでした。「聴神経がない」と言われました。「ない？どう言う事？」と当時は考えもせずそのまま受け流していました。2018年に再度ＣＴスキャンで別の病院で検査したところ、そこでも「聴神経が普通は写るはずなのに、聴神経がどこにも写ってないじゃないか」と言われました。高校卒業時代の話に戻りますが、そんなわけで手術は出来ない、一生このまま…と、手術で治るという希望は絶たれました。なので、しぶしぶ障害者手帳を取得したのを覚えています。そして新聞奨学生としてまず一歩、踏み出しました。

３取り組みの成果

高校を卒業し、まずは新聞奨学生として仕事をはじめました。
まず、役所やらなにやら、全く手続きがわからず学園の女性職員であるＢ職員から色々と教わったり付き添ってくださったりしました。社会人として、一つずつ。提出する書類がたくさんあることや、障害者として様々な手続きがあったり障害者を支援する施設等。また、高校時代に相談出来なかった難聴の先生にも、手紙でやりとりし、障害者と言う立場を利用して障害枠で入社すること等、教えていただきました。

新聞奨学生になりましたが、実際は大学等の学校に行けていません。理由は、当時は大学や専門学校で「聴覚障害に対するフォロー体制がない、心苦しいけれど申し訳ございません」と言う理由で、断わられたからです。新聞社はその理由を理解し、新聞奨学生として入って、本来学校を卒業する時に、「学校に支払うはずだったお金をそっくりそのまま支給します」と言う約束のもと、新聞奨学生として働くことになりました。

この当時同じ障害者として、同じ聴覚障害の人と交流し、初めて自分の障害を知りました。また、最初に取得した手帳の等級がおかしいと言う事も、指摘されました。「このままでは不便ではないか？支援をあまり受けられないよ」と言う事。確かに、高校卒業した時に取得した時は障害６級で一番軽かったのです。軽度障害、ということです。しかし実際の生活には、様々に支障があります。例えば他人の言っていることが補聴器をつけてもわからないのに、６級？とか、宅配等の来訪が聞こえないのに屋内信号装置の支給対象から外れる？等。ひとり暮らしをして、色んな支障があり、再検査を受け、現在２級になった経緯があります。

６級になった理由は恐らく、幼い頃から健常者社会で生き、音に関する振動に敏感になったということと、振動を感じたら「聴こえた」と言う意味の押しなさいと指導されたこと。この悪条件が重なり、本来の障害に合った等級ではありませんでした。「振動＝音」と言う勘違いをしていました。このことは、それまでは誰も教えてくれなかったので同じ聴覚障害者の方に言われて初めて知ったことでした。

写真 3　中国旅行 2004年5月

写真 4　中国旅行　2007年4月

そして中国のこと。中国に興味持ったのは、三国志がきっかけでした。だんだんと、自分自身で生身で知りたくなり、「中国語を覚えて中国に行こう」、と決め、実際に中国人とチャットで交流して中国語を覚えました。聴こえないのにどうやって正確な中国語を覚えたのかと言うと、パソコンで入力することで覚えました。日本語で言う、ローマ字入力することで日本語が打てるように、中国語は正確な拼音入力をしないと中国語入力出来ないため、それをすることで日常に支障がない程度の中国語を自然に覚えました。発音はそのままパソコンに入力する時のままを読んでいるだけなのですが、意外にも通じるものです。四声はどうしたのかとよく聞かれますが、現地の中国人からすると、中国は広く、色んな民族・地方があるので、四声関係ない筆者の中国語を聞いても「北京ではなく、どこ

か小さな田舎の村の中国人」としか思わないと言われました。そのため耳が聴こえないことを言っても最初は信じてもらえなく、後で本当に聞こえなくて、日本人で、中国語を聞いたことがないのに中国を話していると知るとすごく驚いていたのが印象的です。

そう言えば、学生時代の英語の授業の時、ヒアリングが出来なくても発音が綺麗、と外国人の先生に言われたことを思い出しました。筆者は、みんな恥ずかしがってわざとちゃんと発音しないんだと思っていました。今では外国人との交流で気づいたことですが、推測でしかないですが、耳が聴こえないからこそ日本語の音に頼らないので、英語や中国語がすんなりと綺麗に発音できるのではないか、と海外の人に言われました。

日本舞踊へのチャレンジ

日本舞踊をやろうと思ったきっかけは、着物を購入してから、着物を着て何かをしたい、と思ったことがきっかけです。

写真 5　日本舞踊　2011年(左),2014年(右)

先ほど申し上げた通り、児童養護施設で舞踊に触れあってきました。それもあり、また、普通の学校で音楽を習っていた自信もあり、もっと難しい日本舞踊に挑戦したらどうだろうか？と。また、みんなの「どうせ出来ないだろう」と言う固定観念を覆したかったこともあります。今まで色んなことをチャレンジし、「他の聴覚障害の人にもチャレンジしやすい玄関口を作りたかった」と言う考えもあります。

写真 6　乗馬

日本舞踊だけでなく、色んなことに挑戦し、お願いしてきましたが、それには一人では到底難しいことです。

まずは指導等稽古をつけてくれる先生の覚悟や協力が必要な事。その先生を見つけることがどんなに難しいか…中国のようにフラリと行くのは一人でも出来ますが、習い事は理解し、協力してくれる先生がいないと成り立ちません。様々な習い事で、色んな所で断られています。断わられる理由は大体どこも次のような内容が理由です。

受け入れを断わられる理由　(資料1)

- 一. 私学であるため、施設上の聴覚障害者用に改修することは財政上不可能
  →現在は制度を整える大学が多いそうです
- 二. 特別な個別指導は不可能
- 三. 板書きする先生ばかりではないこと。耳で聞いてノートをとったりしなければならないこと。
  →現在はパワーポイントなどと対応策を考えられているそうです
- 四. 学友にフォローするようなことは命令できないこと
  →現在は支援学生を募集してメンターを用意してくれる大学が多いそうです

資料 1　受け入れを断られる理由

(1)私学であるため、設備を聴覚障害者用に改修することは財政上不可能→現在では制度を整える大学が多い
(2)特別な個別指導は不可能
(3)板書きする先生ばかりではないこと。耳で聞いてノートをとったりしなければならないこと→現在ではパワーポイントなどと対応策を考えられている
(4)学友にフォローするような命令は出来ないこと→現在は支援学生を募集してメンターを用意してくれる大学が多い

そんな中、受け入れ、レッスンやお稽古をしてくれる先生に恵まれることはどれほど有難い事か。健常者であれば、そんなことも考えもしなかったことです。健常者だったら、気まぐれにフラッと習いに行こうと当たり前のように考えていたかも知れません。今一度、五体満足がどれほど有難い事か、また、他の障害ではなかったから出来たことを考えて自分を見つめ直すことも大切だと思います。今では普通の事務職として一般企業に勤めながら、障害枠として会社に在籍しております。

結婚も施設長に親代わりとして参加していただきました。

写真 7　結婚式　2015年10月

職場の人たちとの関わりは、たまに理解されない事もありましたが、何とか上司の理解を得、取り持っていただいております。自分自身も勘違いがないように、口頭で言われたらこちらで言われたことの確認のために同じことを話すという確認はしております。主に仕事の指示方法はメールかチャットになります。

４．今後の課題

この障害で健常者のようにやっていることで、また別の問題も出てきています。耳鼻科に行くと、必ず「聴こえないとはあり得ない。こんなに喋れることはない。聴こえているはず」と聴こえない事を疑われることです。これまでの経緯をお話したように、初めは出来なかったことを背伸びして、一つひとつ頑張ってきた結果がこのようなことになってい

るので、この環境や教育が良いのか悪いのかわからなくなります。

本当は出来なくても何らおかしくはなかったはずが、周りのイジメや自分は普通にならなきゃという強迫観念で頑張ってきたことが裏目に出てしまいました。それを考えると今一度、本人の身の丈にあった障害・教育するほうが本人にとっても周りにとっても幸せな事なのか、自問自答しています。

だけど、そんな過去があったからこそ今こうして出来ることがたくさんあったことも否めません。だけど、出来ることが多くなるからと他の聴覚障害の人に同じ教育をしてとも言えません。健常者同様に扱われ、結果自分の本当の障害も分からず、何故皆と一緒に出来ないのか、その苦痛もよくわかるため私と同じ苦しみを味わって欲しくないという気持ちもあります。筆者はたまたま、自分一人で考え頑張ってしまい、その結果として普通の人の様に出来ることが多くなりましたが、このように講義する機会が与えられ、今ここに投げかけます。

今後の課題としては、このような体験を生かし、障害への無理解よる周りの対応やそれに対する自分のアップデート、そしてそれによる弊害。こうして話す機会があれば伝え続けていくことと、このような立場に置かれた自分は何が出来るか。それが今後の課題であると考えております。

最後までご傾聴くださいまして有難うございました。

【参考文献】

林美香「聴覚障害を持ち自立する出身者に対する施設・社会の支援：本当に自分のいるべき場所は合っているのか？」『日本児童養護実践学会第15回研究大会報告集』p.163-168 2023年